

高齢者の自覚

岸 恵子

(女優・作家)

ある年の暮れのこと。クリスマス休暇で来日していた私の唯一の家族と、鎌倉を回った。パリっ子として育った私の娘は、江の島を歩かないと日本へ来た気がしないと云って、「江ノ電」へ乗って一人でもよく出かけていた。

その日、ハンドルは娘に任せていた。私と同じで方向オンチだが、ナビの使い方が上手いし、運転も抜群である。楽しい小旅行を終え横浜の我が家へ向かった。

混みあつた近所の商店街をスイスイと器用に抜け、坂のてっぺんにある、我家の門まで来て、なぜかピタリと車を止めた。

「ママ、車庫入れをしてみてください」

我が家は、三叉路の角にある。ガレージはそのまた角にあるので、三方からくる車を見ながらの車庫入れは難しい。

「死角になっている左からの車をみてくれる？」

「ダメ。お手伝いさんがいない時は一人で車庫入れをするんですよ？」

二人の孫が面白そうに笑っている。(ン？腕だめしか…)

私は運転がめっぽう上手いと信じている。仕事の時はマネージャーやプロデューサーの願望でタクシーを使うが、その他は自分でハンドルを握る方が心地よい。その日、三方からくる車

を器用によけて見事なガレージ入れをしてにんまり笑う私に娘が言った。

「ママン、免許証返納の時が来たのよ」

「えッ!?」私は目をひん剥いた。運転には100%自信があった。

（見ていろッ!）とばかり私はいつもの通り、

岸 恵子（きし・けいこ）



撮影・中西裕人

一九三二年八月一日、横浜生まれ。女優として、「おとうと」「雪国」「細雪」など。

一九五七年二四歳で結婚のためフランスへ出奔。以来四三年間フラ

ンス滞在。NHKBの初代キャスターなどで、紛争地に赴きドキュメンタリーを。作家として、『ペラルーシの林檎』『砂の界へ』『30年の物語』『わりなき恋』『孤独という道づれ』『岸恵子自伝』などを上梓した。

まず前進してバックで車庫入れを完了したのに！

我が車庫は贅沢な間取りでガレージの前に、職人さんたちのトラックまで停められる広い余裕がある。問題は庭の植木を囲う石塀がまあるく弧を描いて張り巡らしてある空間なので、勢いよくバックすると、ドシンとぶつかってしまう。

「今までずっと入れていたのに、今は、二回も切り返した!」

「何回切り返しても、誰にも迷惑かけないでしよ。ガレージ広いんだから」

「町なかにはガレージじゃないのよ。人を傷つけたらどうするの」

娘の声は落ちついて静かだった。

私は八二歳になっていたが高齢者としての自覚は毛ほどもなかった。娘の眼差しの中のやさしさが溢れる必死な説得に心底驚いた。

「ミミイ（孫たちがつけた私の綽名）車がなにと淋しくなるね」

からかい気味に笑っていた孫たちが、私の眼を痛ましそうにのぞき込んで言った。まだ小学

生の幼いやさしさにも驚いた。

ハンドルを握って自由気ままにドライブすることが最高のリラックスだった私が、正直言って少し前から車庫入れが億劫になっていた。家族の心遣いにめげて、その日えいッ！と車を断念した。

我が愛車、グレイメタリックのローヴァーはまだ二万キロも乗ってはいない。それをレッカー車が持ち去ったのは年が明けて二月中旬だった。なぜレッカー車だったのか：断念してからは二カ月間、一度も運転をしなかった。車のない生活に踏ん切りをつけるのに心情的に時間がかかったのだ。

その間に車検が切れていたので高いレッカー車代まで払う羽目になった。間の抜けた話である。

私がこのことを思い出したのは、今年九月二日、池袋暴走事件の加害者に禁錮五年の実刑判決が出た時だった。

当時八七歳だった人物が、ブレーキとアクセルを踏み違えて歩道を渡っていた若い母親と、三歳の可愛らしい幼児を轢き殺した悲惨極まり

ない事故だった。たとえ極刑が下ったとしても、最愛の妻と娘は帰ってこないのだ！

「むなしさに襲われた。二人は帰っては来ない」と言った後、夫であり、父である三〇半ばの若い被害者はしずかに呟いた。

「悲しみ、苦しみ、怨み、憎む。人と争っているわたしは二人が愛してくれたわたしではない。二人に愛される自分に戻ろう」

この言葉に感動して私の胸が震え、頬に涙が溢れた。

「人生一〇〇年」などと飛んでもない言葉がもてはやされている。

支えてくれる身寄りが無い限り、今現在の人間にたった独りで快適な一〇〇歳をまとうする力はないと私は思う。

間違えてアクセルを踏み続けた事故当時八七歳の加害者は、嘗て高い要職について受勲したこともあるという。彼の悲劇は老いて劣化する自身の能力を自覚する能力が無く、それを指摘してくれる身の回りにも恵まれていなかった。不幸なことに私は思う。

もうひとつの「ご成婚秘話」を追って

岩瀬 達哉

(ジャーナリスト)

皇太子の「お妃選び」を取材していた三〇年ほど前、浩宮殿下がオックスフォード大学留学中にフランスを訪れ、その地で小和田雅子さんに会っていたという情報を得て、足跡をたどったことがある。この殿下のプライベート旅行から五年がたった、一九八九年六月のことだ。

その情報は、フランス在住の女性からもたらされたものだった。彼女は偶然にもパリのオリイ空港で「浩宮の一行」を見かけ、たいへん驚いたことがあると打ち明けた。そこにはシスターとともに若い女性がいて、それがお妃候補と騒がれていた小和田雅子さんだったからだ。

旧知の皇室関係者に確認すると、たしかに「浩

宮殿下」は留学中の八四年に二度、フランスを旅行していて、一度目の九月はドイツ国境に近いアルザス地方の科尔マル市などを訪ね、その三カ月後の一二月、こんどはイタリア国境に近いサボア地方のメルビル村でクリスマスを過ごしたということだった。

日本の皇太子がフランスの地方都市を訪ねていれば、当然、地元紙は報道する。わたしはパリに行き、フランス各地の地方紙をくまなく見てみることにした。

いまならどの新聞もたいいていデジタル化されていて、キーワードで「浩宮一行の旅程」とた

たけば比較的簡単に探しだせるだろう。しかし当時はそんなものではなく、しかも地方紙となれば、ベルサイユ宮殿近くの国立図書館ベルサイユ別館にまで行かなければならなかった。一週間ごとにまとめられた新聞の束を、つぎつぎと

岩瀬 達哉（いわせ・たつや）



一九五五年和歌山県生まれ。二〇〇四年、『年金大崩壊』『年金の悲劇』で講談社ノンフィクション賞を受賞。

また、同年『文藝春秋』

に掲載した「伏魔殿社会保険庁を解体せよ」によって文芸春秋読者賞を受賞した。他の著書に『血族の王 松下幸之助とナショナルの世紀』（新潮社）、『新聞が面白くない理由』、『ドキュメント パナソニック人事抗争史』、『裁判官も人である 良心と組織の狭間で』などがある。近著は『キツネ目 グリコ森永事件全真相』（ともに講談社）。

引き出しては、片っ端から各紙の紙面を繰っていくと、ある地元紙に殿下の訪問を歓迎する様子が、旅程とともに報道されていた。空港で一行をみかけたという彼女は、ほらね、という具合にっこりと笑った。

彼女は二二歳でフランスに留学して以来、日本に帰ることなくパリに住み続けている。竹を割ったような性格で、ものごとに誠実であり、そのぶん怒りっぽく、あいまいさには感情を爆発させた。わたしはよく彼女を怒らせたが、なぜかウマがあつた。わたしがフランスで取材する際、いつも通訳をお願いしている。

遅い昼食をとった近くのレストランの、その店のトイレに備え付けられていたコイン式の公衆電話から、彼女は「浩宮一行」が宿泊したホテルや夕食を取ったレストランにアポを入れてまわった。取材の目的を説明し、訪ねる日時を調整するのは時間がかかる。コインはほとんど落ちていく。なくなりそうになると、わたしは店の主人のもとに走り、紙幣をコインに変えてもらう。何度もコイン交換に走っていたからだろう、店を出るとき、主人は彼女にこういった。

「ベトナムって遠いんだな」

翌々日、イタリア国境に近いメリベル村に向かった。そして村長や、皇太子のスキーガイドを務めた地元のスキー教師、さらにはメルビル村から車で二時間ほどの三ツ星レストランのオーナーなどを数日かけて取材した。このレストランは、ヨーロッパの王室の人々がお忍びで訪ねることで知られている。店のサイン帳にはモナコ王女の写真とサインのほか、「徳仁」と漢字で書かれたサインもあった。しかしメリベル村での手ごたえはいまひとつであった。

気を取り直して、つぎの旅行先であるコルマールに向かった。メリベルからコルマールまでは、ローカル線を乗り継ぎ、フランス第二の都市リヨンからTGVに乗るのだが、乗り換え駅とそれぞれの列車の発車時刻がややこしい。そこで最初の駅でメモにしてみらっていた。あとで知るのだが、ちょうどその日がダイヤ改正の初日で、メモを書いてくれた親切な駅員が見ていたのは古い時刻表だった。

わたしたちはのんびりと乗換駅の構内にある

カフェで時間をつぶし、そろそろ次の電車の切符を買おうか、と駅の窓口に行くと、もう切符は発券できないよと駅員は首をふった。

「発車ベルが鳴っているのが聞こえるでしょう。あなたたちが乗りたいという列車のベルで、もう間に合わない」

その日の夜、コルマール市の副市長で、「浩宮一行」が宿泊したホテルのオーナーに会う約束を取り付けていた。この列車に乗れないとなると約束をすっぱかすことになる。わたしはヘナヘナとその場に座りこんでしまった。

しかし、隣にたつ彼女は怒りを爆発させた。
「このメモは、先の駅で書いてもらったものですよ。時刻表が古いといつても、その時刻表を使ってあなたが書いたものじゃない。わたしたちは、今日中にどうしてもコルマールに行かなければならないの。切符を売ってくれなくては困る」

一歩もゆずらず彼女は抗議し続け、その叫び声でホールがいっぱいになった。何事かと奥からでてきた駅長が事情を把握すると、列車を止めておけと指示したのち、すぐさま切符を発行

してくれた。

列車の窓からは、いつまでもベルが鳴りやまないことを不思議に思った乗客たちが顔を出していた。わたしたちは発車ベルが鳴り続ける列車を目掛けてホームを一目散に走った。車掌も身を乗り出し、早く早く、と手招きしている。飛び乗るや、すぐさま列車は発車した。

おかげでその夜、コルマールの副市長に取材ができ、「浩宮一行」のなかに非常にきれいな女性がいたとの証言を得ることができた。持参したお妃候補一〇人の写真を見せると、彼は迷うことなく小和田さんの写真を抜き取った。

「この人です。当時はもう少し髪が長かったと思います」

そういうと、ウインクして続けた。

「大丈夫。フランス人は女性の顔を間違わないから」

帰国後、わたしは『週刊ポスト』に記事を書いた（一九八九年七月七日号）。この記事から四年後、一時、破局が伝えられた皇太子と小和田雅子さんの「結婚の儀」が執り行われている。

記事が出たあと、民放のある記者が宮内庁次長に「あんなこと書かれて抗議しないのか」と迫ったところ、次長はひとこと「絶句です」と語ったという。また通信社の社会部長は、記事でコメントしているフランス人全員に「ほんとうにこんな話をしたのか」と裏取り取材をさせたと語り、「あれ、本当みたいね」といったが宮内記者クラブに公式発表された以上の記事が書かれることはなかった。

後日談がある。小和田さんのことを証言した副市長は口が軽いと批判されるようになり、そのホテルの経営はうまくいかなかった。一方、何も話さなかったメリベルのホテルやレストランは、いまだに栄えているということである。

階段落ち

神奈川芸術劇場で、宝塚歌劇団花組公演「銀ちゃんの恋」を観た。つかこうへい「蒲田行進曲」を宝塚風にアレンジした作品で、主演の水美舞斗みなみ まいとが好演、鬱屈した日々を一時忘れ笑って泣いて楽しんだ。

「蒲田行進曲」と言えば、階段落ち。映画「新選組」の池田屋事件を撮影中、銀ちゃん扮する土方歳三に切られた浪人・大部屋俳優のヤスが、命がけで二階から階段を転がり落ちるシーンが要だ。宝塚版でも勿論その場面がクライマックス。暗転ストロボ点滅でスローモーション映像のようにうまく表していた。

ところが、NHKテレビ歴史探偵「真相！池

田屋事件」の録画放送を見て驚いた。第一に、池田屋へ踏み込んだのは近藤勇を含む少人数であつたということ。外で見張りの隊士はいたが中へは四名。土方は後から合流、「御用改めである」と最初に踏み込んではいない。

第二に、浪士たちは捕らわれた古高の心配もしただろうが、刀を預けて飲み会をしていたようだ。新選組にその長刀は奪われ、短刀しか持つておらず、激しい切り合いというより、浪士たちは逃れようと必死だった。二階から中庭に飛び降りた者もいたという。

番組に興味を引かれて調べてみたら、華々しい階段落ちもフィクションであると分かった。

内藤 啓子

(エッセイスト)

子母澤寛『新選組始末記』にて、近藤によって切られた土佐の北添^{きたぞえ}佑魔^{きつま}が二階から壮絶に転がり落ちると描かれ有名になるが、近年の研究で、北添は自刃して果てたことが判明、池田屋の階段も幅狭く小さかったようだ。

この番組を見るように勧めてきたのは従姉である。彼女は以前から、我らの先祖にあたる長州藩士・木村正幹^{まさもと}に関して調べていた。そしてどうやら、池田屋事件のあった元治元年（一八六四年）六月五日、先祖も京都にいたらしいと言う。

内藤 啓子（ないとう・けいこ）



大阪市出身。東京女子大学文理学部日本文学科卒。父・阪田寛夫の秘書、妹・大浦みずきの個人事務所代表取締役

役を務める。著書『赤毛のなっちゅん』、『枕詞はサッチャーン』。

木村は幕末に毛利藩（長州）の大坂蔵屋敷に務めていたと父・阪田寛夫は書いていた。京の長州屋敷で働いていた時期もあったのだろうか。維新後は、京都府権典事をしていた。井上馨の子分で、先収会社に誘われ、後に三井物産となった会社の副社長を務めた（社長は益田孝）。理財・事務方面に能力があったようで、会社を内から支えた。最後は三井家監査役就任のため、退社している。

木村正幹^{おとながみき}の娘、私たちの曾祖母にあたる大中幹は私が物心つく頃まで存命、一九五九年に八十九歳で亡くなった。最晩年は、娘である阪田京の一家眷属と大阪市阿倍野区に住んでいた。おばあさんが二人いてややこしいので、区別するために私たちは、曾祖母を「ちびばあ」、祖母・京を「おっきばあ」と呼んでいた。「ちびばあ」の部屋へ遊びに行くと水飴を貰えるのが楽しみだった。殆ど寝たきりで、枕元に置いた黒光りする鈴を鳴らしつつ「どーなーたーか、きーてーくーだーさーい」と声を張り上げて呼ぶ。「三井さまの奥さま、お嬢さま」に可愛がられ「木村のみいちゃん」と呼ばれていた

と、二言目には自慢していた。

池田屋事件に戻ると、新選組の目標は池田屋のみでなく、浪士のいそうな店や宿を京のあちこちで探していたようだ。正幹ではないかと思われる木村甚五郎は、長州藩御用達の「魚品」という店にいて新選組に捕縛される。やはり飲み会の最中だったのか。

同番組にも出演した中村武生氏の『池田屋事件の研究』によると、長州藩屋敷留守居役乃美織江の手記があり、どうやら木村は久坂玄瑞と間違われ逮捕されたらしい。乃美は一橋慶喜のもとに出向き「潜伏人」（浪士）ではない者を殺したり逮捕することに抗議をした。特に木村は屋敷の正規の役人として提出した名簿に名前が載っていると訴え、無事釈放された。木村と久坂は年頃や体格が似ていたらしい。久坂は一八〇センチ近い説もあり、木村も背が高かったのか。知る限りでは大名家の人たちは大きくない。もう一つ同著の「召捕之浪人姓名調写」によると、木村甚五郎二十八歳とある。萩の図書館にある資料は正幹（セイカンとルビ）は天保八年生まれとあり数え年なら合致するが、天

保一四年生まれ説だとこの時二十一歳。どちらが正しいのか。こういう面白い話が子孫（身内をネタにする父）まで伝わっていないのも謎である。

明治の初め頃まで木村源蔵と名乗っていたことは分かり色々資料も見つかる。大阪阿倍野にある長州藩「死節郡士之墓」の裏に「築造係木村源蔵」（明治二年建）とある。従姉が見つけた日大法学部蔵の文書にも「京都府権典事木村源蔵来話京府と京都裁判所との訴訟云々」と記載がある。京都博覧会の碑（明治一三年建）には京都府前典事木村正幹とありこの頃には正幹になっている。

ネットで色々検索していたら、正幹の書いた文に対して「読む気にもならない悪筆」という感想があり、この遺伝子は間違いないく子孫まで伝わっていると思った。

東日本大震災からの復活

畠山 重篤

(漁業者・NPO法人森は海の恋人代表)

東日本大震災から丸一〇年が経過しました。牡蠣養殖業という自然相手の商売を営む身として、自然災害との対峙は織り込み済みです。

しかし今回の東日本大震災による大津波は想像を絶する規模の津波でした。学者の方々の見解によれば、約千年前の「貞観」以来の大津波だということです。

何より悲しいことは、親しい友人、知人を失ったことです。個人的には最愛の母を失ってしまいました。

氣仙沼湾に注ぐ鹿折川河口に建っていた老人ホームにお世話になっていたのです。

津波のことも考慮し、土台を高くして建設さ

れていました。しかし、千年に一度の大津波には逆らうことはできませんでした。

津波の翌日、息子を同伴して訪れてみると、鹿折川は前日からの津波の余波で、潮が急流のように上下していました。

老人ホームは対岸にあります。橋を渡らねばなりません。橋の上には、船やら、車やら家の残骸など、ありとあらゆるものが積み重なっていました。その下をくぐり抜け必死で橋を渡りました。建物はすっかり建っていましたが、二階までの窓が破れています。母の部屋は二階です。消防署の人が管理していて入ることはできません。

事情を説明すると「特別ですが」と中に入れてくれました。「百五〇人ほど入所してたので

畠山 重篤（はたけやま・しげあつ）



一九四三年、中国生まれ。牡蠣養殖業、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授。家業のかたわら氣仙沼湾に注ぐ大

川上流の室根山へ植林運動を始める。また子供たちを養殖場へ招き、環境教育のための体験学習を行っている。「森は海の恋人」運動は中学校の国語、高校英語教科書に取り上げられている。その運動において、朝日森林文化賞、「みどりの日」自然環境功労者環境庁長官表彰、緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰、国連フォレストヒーローズ賞を受ける。『日本へ汽水＜紀行＞』で第五二回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。著書多数。

す。七〇人は亡くなったようです」。

母の名前を伝えますと、「この中にいらっしやいます」と告げられたのです。

ベッドの上に白布をかけられ遺体が並べられていました。

戦争のない、平和な時代に生きてきた身にとつてこのような光景に遭遇したことはもちろんありません。この遺体の中から母を探し当てなければなりません。白布を一枚一枚めくりはじめました。

平安なお顔だけではありません。お一人お一人、手を合わせ進むしかありません。

半分ほど進んだ時息子が、「これおばあちゃんのお靴だ」と言ったのです。おばあちゃん子だった二男は大人になっても覚えていたのです。

おそる、おそる、白布をめくってみました。柔和な母の顔があり、ホッとしました。「寒い思いをさせ申し訳ありません」と何回も何回も謝りました。

ペットボトルの水を手ぬぐいに浸し、顔の泥をぬぐってやりました。

市役所から「火葬は二週間後になります」と告げられました。

安置されている中学校の体育館に行ってみると、遺体で埋め尽くされています。どこの体育館もそうだということです。千人を超す人が亡くなることは、こういうことなのです。

それから毎日、お花を持って家内と会いに行きました。遺体はきちんと管理されていて日本の国力を感じました。

形ばかりの葬儀を行いました。仮設住宅から駆けつけた婦人たちが口々に「普段着で申し訳ありません」というのです。殆んどの人が津波で喪服を流されてしまったのです。母と親しかった婦人たちの心情を察しますと、悲しみが深くなるばかりでした。

牡蠣養殖業という仕事の弱点は津波に弱いことです。海に浮かべてある養殖筏は見る影もありません。船も、作業場も無残な姿に変わりはてていました。

でも、最大の恐怖は海の水質です。牡蠣の餌となる植物プランクトンがちゃんと生きているかどうか心配でした。

ありとあらゆるものが海に流れ込み混濁の極みです。特に日本有数の漁港である気仙沼湾には、大きな油タンクが並んでいました。

それらが混じり合った水質は、生命の存在を許さないのです。海から生き物の姿が全く消えてしまったのです。

ある学者の方は、これは毒の水だと表現されました。毒では生き物は生存できません。

しばらく絶望感に苛まれた日々が続きました。五月になって、京都大学の魚類学者、田中克先生から連絡がありました。千年に一度といわれる大津波の後の自然環境がどう変遷するかを調査するチームを組んだので行きますから、というのです。

田中先生は森から海までの環境をトータル的に俯瞰する学問、「森里海連環学」を提唱した方です。

二〇年前になりますが、牡蠣漁師の私を「京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授」に推薦して下さったのです。漁師による広葉樹の森づくり「森は海の恋人運動」の本質を見抜かれていました。

プランクトンネットを曳き、顕微鏡を覗かれ
こう話されたのです。「畠山さん安心して下さ
い。カキが食いきれないほどプランクトンがい
ます。これは森は海の恋人運動の勝利です」と。
平成六年から続けてきた漁師による森づくりの
効果は、千年に一度の津波を経て証明されたの
です。

バナナと革命

梅津 時比古

(桐朋学園大学学長・ジャーナリスト)

バナナの価値観で世代が分かるのは事実である。高齢の世代の思い出しには、子供の頃、バナナが、黄金色した甘美な夢のような果物、いや果物を超えた宝物に見えた記憶があるに違いない。かなり大きくなってからも、バナナはとても高くて、たやすく買えるものではなかった。

幼稚園の遠足で、私にとって最初の衝撃が起きた。楽しみにしていたバナナを出すと、草っ原の隣に座っていたおとなしくて弱い男の子が、バナナを見ている。じっと、いつまでも見ている。それまで話したこともない男の子だったが、とてつもなく可哀そうになった。「あげる」とバナナをその子に差し出した。いきなり

「いらないッ」と思いも掛けぬ強い声が返ってきた。

そのとき刻みつけられたのは、可哀そうと思ったら、はねつけられる、ということであった。

食べ物に関しては、中学のときにも似たような思い出が残っている。3列前に、貧しい家の男の子がいた。当時は親も誰もが平気で「貧しい家の子」とか「お大尽の子」などと言っていた。そして貧しい家の子はたいがい勉強ができない、と子供たちの間では常識になっていた。ひとり、お弁当に豪華な海老フライなどを持つてくる男の子がいた。私が食いしん坊のせい

か、いいなあ、とうらやましがっていると、一人の女の子から「あの子の親は離婚していてお

梅津 時比古（うめづ・ときひこ）



神奈川県鎌倉市生まれ。一九七一年に早稲田大学文学部西洋哲学科卒、毎日新聞入社。

一九八二〜八三年、ドイツ・ケルン音楽大学で研修。帰国後、学芸部でクラシック音楽を

担当。『セロ弾きのゴーシュ』の音楽論』で芸術選奨文部科学大臣賞および岩手日報文学賞賢治賞。NHK制定「日本の100冊」に『ゴーシュ』という名前』が選ばれる。『フェルメールの楽器』などで日本記者クラブ賞。二〇一九年にドイツで『冬の旅 24の象徴の森へ』が翻訳出版され、ゼミナールも開かれた。現在、桐朋学園大学学長、毎日新聞特別編集委員。

母さんが結婚式場に勤めているから、式場の残り物の食べ物を持ってくるんだよ」と、さげすんだような口調で情報が流れてきた。

赤い長い髭がはみ出した海老フライが目をはくだけに、三列前の貧しい家の男の子がいつもほとんどおかわりがないノリ弁当であることも目に付いた。その子がある日、昼食の時間、お弁当の蓋を開ける前に振り返って、みんなに「今日の僕のおかずはなあんだ？」とクイズを出した。いつも「ノリ弁」とみんな知っている。黙っている、一人が「ノリ弁だろ」と吐き捨てた。それを待っていたように、貧しい家の男の子は「はずれ！ 肉だぞ！」と弁当の蓋をあけてみんなに見せた。ノリ弁の横に、縮んだ焼き肉のようなものに乗っていた。私は不意に、自分になにか悪いことをしているような気持ちになって、いろいろおかずが詰まっている自分の弁当を、泣きそうになりながら食べた。

ここ数年、ジェンダーやハラスメントなど、社会に巣くう差別が洗いざらい点検され、追及されている。私が社会に出た一九七〇年代は、今では信じられないような言動に満ちていた。

鮮烈に覚えているのは、大学に新聞社の就職担当の男の人が来て説明会を行ったとき、女子学生の中から「女性も入社試験を受けてもいいでしょうか？」と質問したことである。担当の人はやや沈黙を置いて「受けるのは自由だけど、合格することはありません」と答えた。会場には少し笑い声が上がったが、それだけだった。私も苦笑した覚えがある。今だったら、大変なことである。

新聞社に入社して数日目に大手町のビジネス街の喫茶店で見た光景も衝撃的であった。何人かで上の人に連れられて雑談しているときふと目にしたのだが、違う席から立ち上がってレジに行く紳士が、ウエイトレスの横をすり抜けざま、尻をむんずとつかんだのである。ウエイトレスは別に声も上げなければ、逃げもしなかった。私は「大人の社会ってこんななんだ」と本当に驚いた。

考えてみれば、ここ数十年を除けば、洋の東西を問わず社会に差別があるほうが普通であった。阿部謹也によれば、差別のるつぽと言える中世ヨーロッパの法律書には、字が読めない一

般人のために絵で描かれた社会の序列も掲載されており、そこには神、教皇、司教、修道院長、修道尼、司祭、皇帝、国王、領主、裁判官、市長、村長、農民、封臣、牧人、ザクセン人、ヴェンド人（スラヴ人）、ヴェンド人の女、ユダヤ人、など細かく序列・差別の周知が徹底されている。しかもこの序列は、一応、身分を与えられている者の身分上の差別であって、ヴェルナー・ダンケルトによると、社会としてはさらにその下に、身分をも構成し得ない被差別者が居た。その最下層は、死刑執行人、墓掘人、夜警、煙突掃除人、道路清掃人、森番、羊飼、動物の皮はぎ人、牡の家畜の去勢人、亜麻布織工、れんが製造工、浴場主、娼婦、奇術師、遍歴楽士などである。もちろん、職業を変えることはできず、最下層の人々は、生まれたときから洗礼証明書に不浄と烙印を押され、結婚や法的諸権利について厳しい差別を受けた。それはゲーテ、ベートーヴェンの時代の一九世紀の社会に至るまで続き、名残は今もある。私たちが堪能している文化、芸術の底に横たわっている差別を見据えることは重要であろう。

バナナやお弁当の出来事を思い出すと、寂しさと優しさの感情がまつわりついてくる。差別と孤独の錯綜した実感、認識であろう。人はまず、自分と違うという区別によって他者を認識し始める。そこに価値観が付加されると社会が構成され、差別となる。

現代における差別解消の動きは、単なる社会現象ではなく、歴史上の大革命であるに違いない。